

第12回「西高フォーラム」

—公開シンポジウム—

ご案内

共催 一般財団法人西高会
都立西高同窓会
後援 杉並区教育委員会

一般財団法人西高会と都立西高同窓会では、本年も、杉並区教育委員会の後援を得て、「西高フォーラム」を下記の通り開催いたします。今年は、都の「言語能力向上推進校」（平成24～平成26）の指定を受けて取り組みをして下さった先生方、言語能力の向上のイベントに参加した西高生徒による討論と、社会で活躍している同窓生による討論を行います。広く地域の皆様をはじめ生徒、保護者、教職員、同窓生のご参加をお待ちしております。土曜の午後のひととき、お楽しみ頂きますようご案内申し上げます。

（このご案内は、近隣の方々や西高関係者に配布しております。）

- 日 時 : 2016年6月4日(土) 13時10分～16時25分 開場12時30分
- 会 場 : 都立西高視聴覚ホール（西高正門を入れて左側の建物）
- 入場無料、車でのご来場はご遠慮願います。

第1部 在校生によるフォーラム

13:10～14:10

『多面的・多角的に考えるための言語力 ～西高での実践報告』

第2部 同窓生等によるフォーラム

14:25～16:25

『より良い結論を導く対話力 ～プロたちからの視点』

第1部 多面的・多角的に考えるための言語力

～西高での実践報告

近年、アクティヴ・ラーニング、双方向性のある授業、言語能力の向上推進など、表現はさまざまですが、生徒の主体的な学びをこれまで以上に進めようという動きが目立ちます。時代の変化を受けたこうした新しい動きは歓迎されるべきでしょう。しかし、これらの試みは、西高では昔から当然のこととして実践されてきたことです。西高の立場からすれば、西高が昔から積み重ねてきた取り組みに世間がすり寄ってきたに過ぎません。

現在、西高公民科で実践している「言語」に関する試みは、授業内での「3分間スピーチ」やディベート、ビブリオバトルあるいはさまざまな形での報告や株式学習ゲームへの参加のみならず、授業外でのゼミ形式の読書会や高校生模擬裁判選手権への出場、日経STOCKリーグへの参加、ニュース時事能力検定の受検、公民科担当教員が顧問を務めるディベート同好会や新聞部の活動など広範に及んでいます。もとより、西高には活字文化の伝統があります。記念祭の時に部活動毎に生徒が執筆し編集し発行する部誌の量の多さは活字文化を如実に物語っています。生徒が自分の言葉で考えることは本人の思考力を練成するだけでなく、他者との意見交換によって互いに思索を深めることができます。言語活動は、自分だけでなく、みんながものと考えていく基礎基本です。今回のフォーラムでは、西高での言語活動に参加した生徒諸君にも登壇してもらい広い視野に立って多面的多角的に考えるための言語力を涵養するために西高公民科が取り組んできた実践を報告します。

第2部 より良い結論を導く対話力

～プロたちからの視点

コーディネーター

倉重 篤郎氏 (西 24 期) 毎日新聞社・論説室専門編集委員

「より良い結論を導く対話力」。難しいタイトルをつけてしまいました。ただ、この時代、対話力こそ、困難な問題を解決に導く最も重要なツールではないでしょうか。対話力とは、まずもって相手から多くの生きた情報をいただくことのできるパワーです。対話力はまた、自らの考え方を整理するためにも役立ちます。相手と言葉のキャッチボールをしていく中で、見落としてきた問題を補足し、過剰な部分を削ぎ、より強固で普遍的なものに高め上げていくことが可能です。対話力の最も大きな働きは、対立や違いを乗り越えて和解、合意、協力させる力でしょう。相手の言い分に耳を傾け、こちらの主張についても相手に認めさせ、そして双方が妥協し、かつ得ることによって対立を協調に転換、大きく前進することです。

そんな対話力について、プロたちの試行錯誤を聞いてみましょう。
何か参考になるかもしれません。

パネリスト

**檀野 竹美氏 (西 23 期) (株) テレビ朝日 元報道系・情報番組のディレクター、
マーケティング、危機管理など。現在は、キャリアコンサルタント、産業カウンセラー**

以前、新聞社の論説委員の方に「自分たちが苦労して紡ぎ出す記事が、たった何秒かの映像で視聴者に伝わる」と言われました。逆に言えばテレビは映像がないと成立しにくい、ということです。映像と共に限られた時間で表現をするには、興味・関心を持って、どれだけ多くを相手から聴き、対話していくか、それが日常的にできるかどうかが重要なポイントです。報道のみならず、バラエティやドラマでも常に 100 人規模のチームが動きます。コミュニケーション不足が放送事故や信頼を失うといった大きな失敗に繋がります。長年培った対話力が、今の仕事に大いに生きています。

金田一 秀穂氏 (西 24 期) 杏林大学外国語学部 教授

「対話」は、第三の参加者、すなわち、公開されていることを前提としているように思われますが、お互いに一つのテーマを高め合い、始めにはなかったより高い結論を導き出すような対話の実例をまだ見たことがありません。親子で相談する、友人と相談する、というようなことなら、お互いがどこまでそのテーマについて真摯に考えているか、対人的想像力やおもいやり、配慮がどこまでできるか、などによって決定されるでしょうが、なぜ公開されると難しくなってしまうのか、そんなことを明らかにできればと思っています。

上田 康裕氏 (西 34 期) 電通ビジネス・クリエーション・センター プランニングディレクター

広告のコピーは社会の状況を反映していると言われる。そうしたコピーは普段どういう思考を通して作られるのかについてお話ししたいと思います。私は現在、多数の再開発が進行する東京中心部の都市づくりや電力自由化で激変する電力会社の今後のビジネス開発に関する仕事に従事しています。いっそう複雑度が増す社会の中で、企業はイノベーションを志向し、新しいプロジェクトを組成しようとしています。そこで鍵となるのは、社会や生活者との向き合い、と同時に社内の意志共有の仕方のデザインです。これはすぐれて「対話」のデザインと見なせると考えますが、この現場についてもご紹介できればと思います。

若宮 知佐氏 (西 36 期) 東京学芸大学附属国際中等教育学校 国語科教諭

高等学校の国語科教員として「合意形成」をテーマとする授業開発に取り組んでいます。複雑化した国際社会を生きていく高校生たちに、立場や文化が異なる他者との「真の対話力」を身につけてほしいと願うことです。生徒とともに、震災後の東北に出かけて防潮堤建設についての市民側・行政側双方の主張を聞かせていただいたり、新技術の開発に伴う生命倫理ガイドラインを擬似的に作成したりといった活動を行ってきました。これらの取り組みを通して学んだのは、全員がハッピーになる「合意形成」はあり得ないということ。互いに苦しみを抱えつつ「対話」しつづけようとする姿勢を大切にせねばと思います。